

店先の匂いは十一年前と少しも変わっていないなかった。乾燥した昆布や若布に混じって干魚の乾いた匂いが店中に溢れていた。

変わっていたのは、十一年前に連れて来た時は七、八才だった男の子が、今では手代として立派に仕事をしていることだった。仙吉と呼ばれた若者がそうだった。

仙吉はおずおずとミチの前に進み出ると、両手を揃えて床に付け、額がその手の甲に触れるほど頭を下げて

「その節は大変お世話になり有難うございました。お蔭さまで旦那様、奥様にたいそうかわいがつてもろてます」と挨拶をした。言葉がすっかり上方の言葉になっていた。

「仙吉はほんまにようやつてくれます。番頭を任せられるようになるのもそう遠くないでしょう。うち等も楽しみにします」

そう言いながら六左衛門の仙吉を見る目が優しかった。

ミチは連れて来た若者の訳をかいつまんで話した。そして出来る事なら使用人として使つて欲しい、と頼んだ。

六左衛門は、ミチさんの頼みなら喜んで、と言つておいて「飾り職の仕事が続きたいのなら、ええ職人さんを知つてますよ」

と続けたが、抜け殻のようになっていた若者がその時だけはきっぱりと

「飾り職人になるつもりはありません」と答えた。

いつとき見た、虹のような夢。宗太と名乗った若者にとって、或る日その夢が、夜空に打ち上げられた一発の花火のように跡形も無く消え去ってしまったのだ。

今の宗太にその夢のかけらを綺麗さっぱり捨ててしまえと言うのは簡単ではない事をミチは分っていた。

だから此処へ来るまでの道すがら、宗太を励ますことはしなかった。泣きたいだけ泣くにまかせておいた。

自分がそうであつたように、沢山泣いたほど立ち直りが早い、とミチは考えた。

それにしても、とミチは思う。仲を裂かれたことを知らない娘の方はどうなるのだろう。

知らない内に知らない縁談が進み、間もなく本当の話をかされるだろう娘が平常で居られるとは思えなかった。

山中で世話になつたちえの姿が重なつた。

親が進める縁談からのがれたちえは、それからの人生を、まるで強い風の後押されるように、浮き世の荒波に翻弄されて生きて来た。

苦勞知らずの娘が、長くすさんだ暮らしの間に身に付けたのは諦めだったのだろう。諦めは同時に滅多なことではくじけないしたたかさも身に付けた。

そうして生きて来たちえだったが、時折見せる寂しげな姿をミチは見逃してはいなかった。

稔という娘がそうならなければ良いのだが。言い交した二人が不憫でならなかった。

夕食をいただいた後に茶室に招かれたミチの胸は、初めて離れの茶室のにじり口を潜った時の記憶が一気に蘇った。

沢山の茶会に招かれ、主催もしているが、六左衛門の茶室には他で味わうことの出来ない思い出が詰まっている。

ミチは幽かな胸の高鳴りを感じながらにじり口を潜った。辞儀をして顔をあげたミチは、柱に掛かっているはずの芭蕉の短冊が無いのに気が付いた。

怪訝な表情に気付いたのか六左衛門が

「短冊がのうなつてまっしやる。」と笑っているようでもあるし、困惑しているようでもある複雑な表情を浮かべた。

或る日、六左衛門に短冊を譲った近江の商売仲間が、全く久しぶりに訪ねて来た。

何でも、どうしても短冊を見せたい人がいるので暫く貸して欲しいと言ったのだ。

元は渋るのを無理矢理、半ば強引に譲り受けた六左衛門だったのだ、仕方なく貸しはしたもののそれっきりになった。ふた月ほどして便りをして見たが、空しく手紙が戻って来

た。人を介して聞いた話では、店は古手の着物を商う店に変わった。わっていた。

「なんでわざわざ此処まで短冊を取り戻しに来たのか、よくわかりません。そりや芭蕉の短冊ですから、売ればいくらにはなるでしょうが、そんなに困ってはったのかな。短冊を借りに来た時はそんな風には見えませんでしたか……」

六左衛門は納得が行かないといった顔つきでミチを見た。ミチは、もう一度会えると思つた短冊の行く先が気になって、ろくに六左衛門の話しを聞いていなかった。

短冊を取り戻しに来た近江の商人が無垢の芭蕉好きで、尾羽打ち枯らしたあとに唯一心のよすがとして短冊を取り戻しに来たのであれば、それはそれでもいいではないか、と思つた。

だけど、成り立たなくなつた、たつきの手当に使つたのだとしたら、もはや諦めるしかない。好嗜家の収集の一つになつて行く先も判らなくなつてしまつてに違いない。

ミチは短冊が掛かっていた柱をもう一度見上げた。会つたこともない短冊の元の持ち主と家族が、街道を肩を寄せ合つて遠ざかる後姿が見えるようだった。

急ぐ旅ではなかったが、翌日の朝にはいとまをしようと思つていた三日目の夕刻、住吉神社にお参りをして帰つたミチを待ちかねた六左衛門が、両の手を体の前でおいでおいでをするように揺すりながら帳場から飛び出して来た。そして

「短冊がもどりましたよ」と満面の笑みを浮かべてミチに伝えた。

短冊のことはすっかり諦めていたミチに六左衛門の言葉は意外だった。

土間に下りた六左衛門は、きよとんとしているミチの手を引きずるように庭を横切つて茶室へ連れて行つた。

茶室の柱には間違いなく芭蕉の短冊が掛けられていた。

「これは？」と訝るミチに、六左衛門は興奮が収まらない様子で顛末を話した。

ミチが住吉神社のお参りに出掛けたのと入れ替わるように、六左衛門と同業の喜兵衛という堺の商人が訪ねて来た。日頃、足りない商品を融通し合つたりして懇意にしている男だった。

この日も足りなくなった品物を融通してもらいに来たのだが、挨拶の後で見て貰いたいものが有る、と言つて風呂敷から取り出したのが短冊だった。

「この短冊、以前こちらで拝見したのとよう似てますが、別物ですやろか？」

その短冊を見た六左衛門の目は驚きでまばたきを忘れた。「どうしてこれを？」

「いやね、おたかさん(近江の多賀神社)に参つた帰りに、草津の骨董屋に軸のええのがないかな思つて寄つたところ、何や見覚えのある短冊があるやおまへんか」

喜兵衛は、それを六左衛門に見て貰いたくて二両で買い取つたのだ。そして仕事の序に六左衛門のところに持つてきたのだった。

三両で買わせて貰いたいという六左衛門の申し出を、金は要らないと言つて喜兵衛は短冊を置いて帰つた。

吉井の渡しでおせつかいをしたことで、ミチは六左衛門夫婦と再会をはたした。そして今、短冊とも再会をすることが出来た。

ほつとする気持ちの裏側で、連れて来た宗太にも奇跡が起こつて、今までと変わらず稔という娘と再会できないものか、と思うのだった。